

ポケットジャーナル



★半ドンの会文化賞

県下の11名が受賞

1月21日(月)午後6時から大丸神戸店7階にて、昭和54年度半ドンの会文化賞贈呈式が行われた(主催・芸術文化団体半ドンの会)



表彰式の風景

会小林武雄代表による昨年一年間の運営経過報告が始まり、続いて贈呈式となり戸谷兵庫県副知事、白川渥神戸市教育委員会委員長らから表彰状と記念品が各受賞者に贈られた。

△受賞者▽現代美術賞文芸部門／藤村省三(短歌、兵庫県、68歳) 船越昌(小説、水戸市、48歳)、同美術部門／中石瑛(洋画、神戸市、45歳) 宮崎亮吉(日本画、加古川市、63歳) 文化功労賞／内海繁(短歌・文化、姫路市、70歳) 来住一(演劇・文化、西脇市、49歳)、及川記念新人奨励賞／西野妙子(評論、宝塚市、

★安井賞、金山賞決定

このほど、第23回安井賞展(財団法人安井曾太郎記念会、西武美術館、毎日新聞社主催)の候補作品が決定した。

今回は全国から174作家337点のなかから66作家67点が入選し、安井賞候補には、神戸市の堀江優さんの「ペテロ」が選ばれた。堀江さんは、昭和8年神戸市生まれ。神戸大学教育学部卒。水彩連盟会員。東灘区在住。46歳。

なお、入賞、入選作品の展覧は西武美術館のあと全国を巡回するが、5月10日から6月8日までには、姫路市郷土文化センターで開く。また、第3回金山平三記念美術賞の受賞作も決定。今回は70作家140作品のなかから神戸市の南和好き

んの「化石になった女」が選ばれた。



金山賞受賞「化石になった女」
円内は作者の南さん

南さんは、神戸高校卒業後本格的に絵を描き始め、現在、神戸新聞社勤務。行動美術協会会員。垂水区在住。47歳。

★ミレーの「落ち穂拾い」などが一堂に展覧

兵庫県立近代美術館(橘崎四郎館長)は今年10月、開館10周年を迎えるが、その記念展第一弾の内容が決った。



ミレー「羊飼いの少女」

「フランス・バルビゾン派の名画―ミレー、コロー展」がそれで、4月19日から5月18日まで同美術館で開かれる(月曜日休館)。バルビゾン派とは、19世

誕生日
ありがとう
運動



三宮センター街善意の会のご協力

三宮センター街善意の会(会長 岸野利男氏)は、センター街各商店の方で結成され、いろいろな社会奉仕活動がされています。本運動にも、この運動発足当初の昭和四十年以来、いろいろなご支援をいただけてきました。なかでも、昭和四十年には、笑福亭仁鶴さん、桂小春団治さん、桂春雄さんら数名の落語家による「ラヤリライ落語会」や、センター街でのピラ配りをしていただいたこともありました。また、このたび本運動に対して多額の運動資金のご惠贈をいただきました。そこで、本運動では、次のような感謝状を贈呈して、お礼といたしました。

感謝状

三宮センター街善意の会

会長

貴会は誕生日ありがとう運動

発足当初より本運動の精神にご理解を示され多年にわたり幾多のご協力をいただきました。さらに、このたび本運動が十五周年記念を迎えるに際し多額のご惠贈をたまわり、ここに貴会のご行爲に対し深く感謝の意を表します。

昭和五十五年一月二十五日

誕生日ありがとう運動本部

61神戸市鈴合区御幸通八一―六
神戸市国際会館一階の郵便局の隣
電話二五一―八六一内線三二六

紀中頃、フランスのフォン・テヌブローの森の小村ーバルビゾンで絵を描いた画家を中心とした一群の風景画家のことであり、今回の展覧会にはミシェル、コロア、ドゥカン、ユエ、ディーズ、ボドメル、トロワイヨン、デュプレ、ルソー、ジャック、ミレー、ドービニ、アルビニ、レールミットの14作家約140点が紹介される。本格的なバルビゾン派展として大いに期待される催しだ。

★今年も話題を呼ぶ
アート・ナウ'80開催

関西の現代美術の最前線を紹介し、毎年話題を呼んでいる「アート・ナウ展」が3月2日から30日まで、県立近代美術館で開かれる



昨年のアート・ナウ'79会場風景

(観覧料)一般200円、大・高校生150円、中・小学生100円
同展は今年で六回目を迎えるが、これまでのように

中堅や実績のある作家ばかりでなく、これからの活躍が期待される新鋭にも発表の場を提供するという姿勢は変わらず、今年は次の29名1グループが出展する。

▲立休木内喜雄(京都) 北野正治(大阪) 信貴賢(大阪) 曾我孝司(同) 樋口洋子(同) 堀行雄(兵庫) 松本薫(京都) 平面上前智祐(兵庫) 大寺俊紀(大阪) 木村嘉子(同) 日下部一司(同) 黒川博(京都) 斎藤俊徳(広島) 田中一好(兵庫) 野村仁(大阪) 福田弘美(奈良) 森田秀(京都) 山本和弘(大阪) 横溝秀実(同) 吉田廣喜(兵庫) 飯田石井千晶(広島) 木村浩(兵庫) 村上文生(京都) 森俊夫(岡山) ▲陶芸▽野田信二(京都) 林正子(大阪) 星野俊子(同) 母袋幸子(同) ▲染織▽麻田信二(京都) ▲共同制作▽ザ・プレイ

★白い異人館を背景に
レコード制作二題

去る2月16日、北野・白い異人館でサントノレ北野店のミュージシャンたちによって発表された「神戸物語」がレコードとなった。3月16日に発売される。



「神戸は俺の街なんだ」と歌う
この曲は、
木場孝雄さん
昨年6月に完成し、サントノレ北野店で歌われていたが音楽関係者からも注目され始めていた。シンブルな曲で、作詞・作曲し、そして歌うジョーこと木場孝雄さんは「神戸のみんなに口ずさんで欲しいんです」と話して

いる。B面もやはり木場さんのオリジナルで「パティパティ」。

販売はサントノレ北野店およびアロード店、神戸子編集室、星電社ほか、600円。

また、アメリカ・ニューオリンズ市の名譽市民でもあるアマチュア・デキシール・ラ・スカルズが、去る1月20日にやはり白い異人館で録音し、3月21日、ビクター音楽産業からLPとなった発売される。「リンゴの木



ニューオリンズ・ラスカルズ
(白い異人館にて録音中)

の下で」など1900〜1910年代のアメリカカンソングを中心に構成され、タイトルも「GOOD OLD DAYS」。プロデューサーの末広光夫さんは「この白い異人館はまるでニューオリンズの古い家の雰囲気、ラスカルズの演奏にはびつたりです」と話し、クラリネットの河合良一さんも「終始ニューオリンズで演っている気分でした」とゴキゲン。神戸デキシールランドジャズ協会の推せん盤。

美術ガイド



★県立近代美術館

アートナウ'80

★西宮市大谷記念美術館

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★5回松本原画展

★神戸の歴史研究論文

「神戸の歴史」刊行

条理制などの研究で、その業績が高く評価されている落合重信さん（長田区在住）が、このほど「神戸の歴史（研究篇）」を出版した（後藤書店刊2800円）



落合重信さん

同書には、昭和16年発表の「『萬葉考』の刊行事情と植田春海」をはじめ、「長田神社創祀の時代」「生田神社の歴史的地理的環境」「神戸地方の条理」「万葉地

花時計



ある留学生会館を訪ねて

先日、関西にある、ある留学生会館を訪れた。アフリカからの一人の留学生に会うためだった。

その日はたまたま祝日で、昼前に訪問すると彼はしばらくしてバナナとクッキーを出して食べ

理神戸編」「魚住ノ泊をめぐって」「烽の摂播経路」「福原遷都・一ノ谷合戦」の15篇の論文が収められている。

後藤書店／三宮センター街
電話331-3362

★人生七〇年の感懐を

一冊にまとめて上梓

永年、図書館の世界を歩き続けて来た南諭造さん（芝田町ビル取締役、播磨興産編集室長）が、このほど随想集「書窓の感懐」をみるめ書房から上梓した（B6判190頁1500円）

これは、ミニコミ誌「大阪手帖」に連載したもので一冊にまとめるについては「書窓とともに半生を送っ

じめた。「昼食は食べないの？」と聞くと「今日は祝日なので会館の食堂は閉まっていて一日中食事はできないんです」という。

この留学生会館は文部省招待の国費留学生が、世界の24カ国から80人ほど生活をしているが、祝日で食堂が閉まっているため、全員が外食をしなければならぬ。

四畳半ほどの広さの個室にはスチームが入っているが夜の11時に切れてしまうので、午前一時や



南諭吉さん

て来た者として、「人々や書物との出会いの不可思議さや

館の存在が私に

に深いつながりを持ってい

るかを、自分自身の哀歎の

交錯した体験をもとに記録

し、それを書物として残し

たかった」という著者の情

熱があった。全体はIわが

人生の哀歎、II典拠探求、III

三つのアルバム（人物・書物・書店）の三部に分かれ、

22篇が収められていて、仲

々味わい深い好著である。

みるめ書房／灘区岩屋町3丁目

1-4 電話871-10551

二時頃まで勉強をする彼はスチームが切れた後、電熱器で足や手を暖めながら机に向かうという。会館を出ると屋根に労組の赤い旗が大きく揺れていた。遠く離れた異国の地でバナナとクッキーを食事代りに食べながら彼は日本での生活をどう感じているのだろうか。

来春にはポートアイランドにも神戸大学の留学生会館が建設される。運営には留学生の声にも十分に耳を傾けてほしい。

(H)

●KOBE POST

★第31回読売文学賞のA時歌俳句賞Vは、「ボルカ・マズルカ」の

竹中郁氏が受賞されました。

★「小論賞」平素集（『33、800』）が、三月五日朝日新聞社より刊行されます。

★神戸二紀展が二五周年を迎え、さんち広場、県民会館アトリで二月一四〜十九日迄開かれ、生田神社会館では、期間中えびら賞をうけた高崎研一郎氏が個展を、又元町画廊賞をうけた受賞者山崎明三、大重徹、宮地孝、松下元夫、高崎研一郎、大西敏己、渡辺照定、井尻源一、大島幸子、小原実知成、滝本周造、梶滋氏の12人展が十三〜十九日に元町画廊で開かれました。

★カメラの大山洋治さんと木彫の大山昭子さんご夫妻が、ワイナリー・ストリート・アート・センター大阪市南区巽合中町28川広ビルB1室（06-241-1445）を開かれました。

★三月七日午後六時から相楽園会館で「グレボートピア」世界の味を楽しみなが成功させよう。あしたの会県民市民の集いが開かれます。かいひ五千人。お問合せ平岡神戸市青合区雲井通七ノ四神戸新聞社文化事業局電話三二一四二二

★神戸の源平史跡を歩く会（平清盛八百祭行事）／テスト踏査2/3月中旬／コース決定3月下旬／実施（一般市民参加）4月20日（日）4月27日（日）5月3日（日）5月5日（祝）以上の予定で全市の源平史跡を可能な限り訪ねて歩く主催、丹生文化を育てる会平岡11神戸市北区甲台台一丁目9ノ1〜10三杜山悠方電話075五九二六八四八

★きやうり神戶時代（北野坂）で三月一日〜十五日迄、岡崎雅子八新制作三月十六〜三十一日迄、藤田清照さんの個展が開かれます。

世界の国から大型船が出入りする国際港

50分間の
ミニ船旅

国鉄周遊指定地



神戸 港めぐり

定期運航時刻表 (所要時間約50分)

便	平 日	日曜・祝祭日
1	10:00	10:00
2	11:00	10:30 ※
3	12:00 ※	11:00
4	13:00	11:30 ※
5	14:00	12:00
6	15:00	12:30 ※
7	16:00 ※	13:00
8		13:30 ※
9		14:00
10		14:30 ※
11		15:00
12		15:30 ※
13		16:00
14		16:30 ※

※印は冬季(12/1~2/末)運航休止します。

12月29日・30日・31日は休航します。

(夏季には納涼船も運航いたします)

団体貸切船についてもご相談に応じます

(夏季納涼船・お得意様のご招待・船内/デッキ・各種催しにご利用下さい)

運賃 大人... 700円
小人... 350円

(団体割引15名以上)

のりば

中突堤ポートタワー前

(国鉄元町駅西口下車南へ徒歩約10分)

☎ (078) 391-8633・331-6088

神戸通船株式会社 / 神戸市生田区波止場町中突堤

これからのお店の衛生管理はトータル
サニティション(殺菌, 防カビ, 防殺虫,
防鼠施工)の時代です。

衛生管理

- 店舗、住宅を微生物(細菌、黴)
微細害虫(ダニ、コナダニ類)、衛
生害虫(ゴキブリ、鼠)、建物害
虫(シロアリ、木喰虫)、衣類害
虫(イガ、カツオブシムシ) から
守ります。

- 書籍、骨董品、段通、毛皮製品
等の保管についてはご相談くだ
さい。(無料相談)

ねずみ



ゴキブリ



撃退大作戦

三洋化工株式会社

神戸市生田区中山手通1丁目75
電話(391)3195(代)・(331)6619・(321)2727

●第4回神戸女流文学賞受賞作品

影と棲む 3

田口佳子

絵/田中徳喜



お茶が薄いと父が不機嫌そうにいつている。そうすかと、母は急須の蓋を取って、ばっさりとした葉をつぎ足した。

あんなに濃いめが好きなのなのに、自分の好みの程度を絶対に変えず、薄味が健康のためにいいという父の舌を無視して、こつてりとした田舎風の辛味の料理は、今も少しも変わっていないのだらう。

台所で、母と娘は、父の味覚をめぐってよく争ったものだった。洗濯物の糊の加減も、風呂の湯加減、酒の燗から、寝床のシーツの具合まで苑子の目と手をくぐらねばならなかった。今は、否応なくそれを母がやり、父の読書の時間を、凄まじい読経の声で侵すのもやはり同じに違いなかった。

父がいた頃と同じね。何もかも自分のペースで生きてるってことね。

苑子の見た限りでは、母は少しも弱ったりしていなかった。むしろ弱っているのは父の方だと思えた。

アパートへ訪ねて来る時とは違って、自分の家にいる気易さのせいかその表情は頼りないほど力なく、母の存在の蔭に薄れてしまっている。

父が若い頃からこの人にはずいぶん勝手なことをされて泣かされたからね、残された私の人生をどう生きようと勝手ですよ。

母の眉は冴えさえて明るく開かれていた。

「苑子、今の仕事いつまでやるつもり？」

肉声が向けられた。

さあね、と苑子も現実の声に戻る。

「そんなことわからないわ、三十越して仲なかい条件の仕事もないし、それに何よりもばあっとしたことがやってみなかったの」

彼女は腰を上げた。サングラスをかける。

船色の中で見る見なれた抹香臭い茶の間には、もう二度と自分が坐る場所はないように思えた。彼女は満足してその場を離れた。

「帰るわ」

「何か持って帰るのではなかったの？」

「もういいわ、面倒くさくなったから」

両親は玄関まで送って出たが、扉を閉める時、母がさっさと先に背を向けるのが父の肩越しに見えた。

「洗濯物、取り入れといたわ、まったく、急に降ってくるんだものね」

隣りの若い主婦がきちんと畳まれた下着類を持って来てくれた。父のも混っている。

主婦の目は、敏感なアンテナみたいに揺れていた。苑子は陽気な煙幕を張ることをいつか覚えた。

「頂きものだけれど、少しだけ：坊やに」

舶来のチョコレートをつかみ、紙に包んで渡し、話題の隙をみつけて入りこもうとする主婦を帰らせた。

遅い朝食を一人でとるのは、大抵十一時前後になる。牛乳をたてつづけに二本飲むと、荒れた肌が潤って張りを取り戻すような気がした。一枚のトーストを食べ終わらぬうちに、体の細胞が整えられ、感覚が甦って行くみたいな気分がひどく快い。

夜は疲れて眠ってしまうと、昼間は時間に追われる忙しさが待っている。

一人なのだと、一番しみじみ感じるのは食事の時だった。がらんとした卓上に、自分のためだけのものが並ぶ。結婚するまでは、両親と三人で卓を囲みながら、苑子は体も心も常に父と向き合う場にいた。晩酌の肴も、話し相手も食事の世話も苑子の手にかかった。

時として、父と娘はブランドグラスを傾け、共通の好みの話題に興じた。古曲文学や歌舞伎に通じる父は、同時にスポーツ好きでもあり苑子にいろいろな分野への豊かな興味の導火線を敷いた。彼女が愛したのは、そういった趣味の世界に遊ぶ父より、仕事のことを話す時の彼だった。国情、民俗性の違いが、一つの商品の取り引きをめぐって微妙な変化をもたらし、駆け引きのこの

妙味が危険な苦勞と背合わせになつてゐるのを話してくれる父親は、弾力ある感性で常に時の流れを先取りしてゐるような所があつた。

昌男と結婚した苑子の立場は逆転した。

夫と姑は、丁度娘の頃の苑子と父親を置き換えたかたちで共通の話題に埋没した。

息子に絶対に素顔を見せぬ母親は、夕方になると、弟子の来ぬ休日であっても美しく夕化粧して待つ。音楽を流しながら、真つ白のバックした顔で仰臥する姑を見ると、苑子はぞつとして目をそむけた。化けものゝ彼女は思った。美しさへの執念は、息子へのなまなまとした情愛の深さをはばかりことなく表わしてゐた。

食卓で、母親は息子の仕事の設計のことを話させたが、息子は母親の、埒もないお茶お花の弟子の噂や家元との関わり方を話すのに根気よく耳傾けた。ごく一般的な、家庭的なことについても、苑子の言葉は風のように吹き過ごされた。

今、苑子は誰との繋がりも持たぬ場で食事を終え、一服吸いつける。煙がじわりと鼻孔を通り抜ける時、快く喉を刺激して、ほつと崩れるような寛ぎがあつた。寛ぎの中を少しずつ音が入りこんでくる。雑然とした生活の手ざわりみたいな音に囲まれるのにも慣れた。音に囲まれることは、他人に囲まれることだった。一軒の区画が大きくて隣人との距離があつた生家や婚家に比べると、ここは壁一重の人間くさい密集地だった。

他人がたてる生活の音を縫って、時折、母が朝夕の勤行に鳴らした木魚や鉦の音を聞くような気がする時があつた。

家中の空気を、韻々と読経の声がステッチし、刺し子のようになつた空間で、苑子の存在感がしつかりと縫いつけられてしまふ。

母は体中のエネルギーをぶつける勢いで経を読んだ。それは苑子が物心ついた頃から切り離すことのできぬ一種の生活音だった。

苑子はいつから母に憎しみや反発を感じはじめたのか覚えがない。そんな感情より先に、幼い正直な感覚で、両親の感性を嗅ぎ分け、本能的に母に嫌悪感を抱いてゐたのではないだろうか。そんな風に考えると、思い当たることがあつた。それは突然、やって来たようでもあつたし、あの読経の声と香の匂いの中から少しづつ滴のように心身を侵しつづけていたともいえるようである。はつきりと拒否反応を示したのは、父が心筋梗塞で倒れた時だった。

母は何のかのいつて看護をしたがらず、昌男と結婚して間のなかつた苑子が付き添つてゐた。医者や看護婦から、奥さんですかといわれた時、苑子は生暖かい血を浴びせかけられたような気がした。憤りが全身を走つた。間違えられたことに対してではなく、当然そう呼ばれる立場の母がそこにいなかったことが、苑子の羞恥心をひつぱつた。

赤電話の受話器を握る彼女の声は尖がつてゐた。呼吸を整え鎮める間もなく母は出た。

「私よ：私だつてお姑さんのいる身でそうは自由に出来ないのよ。代わつて頂だい、当然のことでしょう」

母は黙つてゐた。発信音の中に不満が滲み拡がりふくらんで行くのが伝わってくる。

「それが：そうね、じゃ明日行きますわ」

やつと声らしいものが返つて来た。周りに気がねして、押し殺した苑子の声とその言葉尻に噛みついた。

「どうして今日すぐ来れないの？」

「宮内さんのご主人の法事で丁度これから出かけるところなので……」

「生きてる人と、死んだ人と、他人と自分の長年連れ添つた夫とどちらが大事なの？」

黒っぽい盛装の母が見えるようだった。

彼女は、抹香臭い集りに第三者として席をつらねるのが好きだった。自分とは無縁の涙や、突然の不幸は彼女をよりいきいきとさせた。

「人間って、人生って脆くてはかないもんですわねえ」と感じ入り悟りきったような、しっとりとした声は堂に入り、連なる人たちの新たな涙を巧妙に誘い出した。



黒がよく似合う、まだあでやかさの失われていない老女の、鼻にかかった哀調の声は悲しみの最中にも、とかく拡散しそうな人の心をよく引き締めて絶妙の効果を挙げた。そういうしながら、一つの儀式めいた行事をす早く批判し、計算し、何かと比較して臆測する。

日常生活面では、疎いところやルーズな面も多いのに、そういう場所での知識は足りていて機転も利くので何かあると担ぎ出されるのだった。それを母は、自分の人徳だと満足しており、他人のために気軽に黒っぽい装いをくり返してはばからなかった。

「高畑の家にわるいから、お前はもう帰ってくれ。僕は大丈夫だから」

父は、母が来ない訳を知ると、苦笑いしていった。妻の個性にとくに匙を投げた風の彼の、洗い晒したように静かな顔にゆっくりとよぎる苦笑は、やはり一つの情として苑子の目には写った。そうなる尚、母への憤りが胸のどこかで、ふつふつとかなかな音をたてる。何十年の夫婦の年輪を積んだ、夫と妻の心が苑子にわかる筈もない。自分が病いながら、「母さん、元氣そうだったか？」と問い、自分の世話をせず他人の法事に忙しそうに出かける妻を、苦笑で見送れる父に、彼女はもどかしさを感じ、同時に母に強い嫉妬を覚えた。

とうとう二週間の間、母は何度か見舞いという形でやって来ただけだった。

それも、タオルが不足だから持って来てくれというのに、大判の風呂敷を持って来たり、父の好みの物菜を作るようにいっても、開いてみるとまったく違う母の好みの料理の一品が出て来たりした。

咎めると、こんなおいしいものを一人前だけ作るのは勿体なかったからだ、と、わるびれもせずという。そして薄化粧した鼻の頭に皺を寄せては、周囲を、眉をしかめてじろじろと眺め、薬品においては嫌いだといった。

看病に出かけて来ない母に業を煮やして、苑子が家へ行くと、門を開くより先に高い読経の声が彼女を迎えた。

母は祭壇の前で、煙に巻かれながらうつとりと上氣した顔を向け、

「まだお父さんは死にはしませんよ。そういう感じがするから」

といつもの口調で押しつけるようにいった。

「予言や直感やお祈りより、今要るのは看病よ、他人じやわからない血の通った心よ」

自分でもはつきりそうだとわかる反発をこめていうと、燦んだ沈黙の憎悪がはね返って来た。何もいわなくても、苑子にはわかる。

「私は若い時からあの人の身内の冷たさや、あの人自身の放埒さにはずい分苦しめられて来ました。胸が苦しくなる病氣は、自分の良心の鞭なのです、苦しんだらいいのです。少しでも罪が浄化されます。あなたが世話をしたいのならそうしたらいいけれど、私はいいですよ」

母のこれまでの生活信条や論理を知りつくしている苑子に、読経の声は単なる祈念ではなく、不快な現実から逃れるための一時的な甘美な自己暗示の呪文としてしか聞こえない。

いやなことがあると、母は祈りに逃れた。

自分で自分の声の抑揚にいつの間にか酔い、頬を紅潮させる姿は見ようによつては不気味で、どこことなくセクシュアルな感じがした。

彼女だけがもつ自由な拡がりの想念の世界にある時、母が解き放たれたような奔放さの中で活気づき、女っぽく艶めいて見えるのが不思議だった。

声の波に酔い切っている彼女は、祈る時も、性行為の時も似たような表情をするのではないかと苑子は思った。嘆きながら形なきものに何やら訴えながら、涙と吐息の中で母の顔にはやはり一つの恍惚感、絶頂感があつたからである。

枯れきっていない母の、女としての情念が香煙と一緒には汗ばんだ体臭に混って全身から立ちのぼるようだった。

発送人の名を書く時、わざと自分の名前にしようかという氣持がちらつと動いた。

だが、思い直してやめた。初めからそうするつもりでハンドバッグに入れていたメモ用紙を取り出す。

勤めている店の所在地とママの名前を記した。品物を受け取った当人とは、いずれ店で会った時に話せばわかることだった。

選んだ男女ペアの時計は、彼の娘や息子の腕で時を刻むだろう。案外、妻の方があっさり使うかもしれない。特別高級品ではないが、多分に皮肉をこめた上、今後の牽制の意味も上乘せしたので、返しの品にしては高くついた。それだけに、ふっきれた思いで彼女は売り場を身軽く離れた。

苑子は、自分を娘のように可愛がってくれる年配の客を好まない。

いたわりや、訳知り顔のだらかさが、年輪の上に隠やかに惨むのは却って胡散くさくていやだった。正直な、中年のぬめっこい欲望や、若い情熱や、ためらい勝ちの初老のふっきれぬ火を騒す方が素顔と相對する奇妙な安心感があった。老いの仮面はいやらしくて、底深く氣味がわるかった。

何の代償も求めずに、淡泊な指名がつづいて、高価な贈り物を届ける人が、不審がる苑子に、死んだ娘にそっくりだというのを聞いて、貰った品の額を上回る物で丁度、今日のように送り返したことがあった。

あとでママに、

「馬鹿ね、そのままにしたらいいのに、あの人には娘なんていないのよ。口癖みたいな一種の口説き文句なの、それにその言葉に乗せられたところでご本人の体はもういうことを利かないんだから」と笑われたりした。

今日、送り返した客の一人は、そうではないらしくていじましい下心が、不器用な野暮ったさで時折覗くので、早くけりをつけたかった。

△つづく▽

Hat dog



なんすい
軟水のCoffee
味、また格別。

営業時間 午前10時～翌午前2時



コーヒーハウス

ハットドッグ

バス停〈中山手1丁目〉南側角

☎ (078) 321-1689

●神戸元町で生まれた美味●

とんかつ



- ビーフ(神戸肉)かつ
- ビーフバター焼
- ロールかつ定食
- チーズかつ定食
- ヘレかつ定食
- ロースかつ定食
- 海老かつ定食
- かきフライ

とんかつ
二つ茶碗

元町駅		
	とんかつ一膳 二つ茶碗	鮮
元町三丁目	元町一番山	川
		大丸

溶ける闇

高木敏克

絵/木村光佑

3

ぼくが入ったホテルの入口は、まるで炭坑の入口のように真黒に煙り、奥の方を覗くと、一つだけの裸電球が鋼鉄製のエレベーターの骨組を照らし出している。だが、光を受けているのは鉄骨ではなく、その上を薄く被っている埃なのだ。だからその埃をぬぐい去ると、この坑口のような入口の奥には、裸電球以外の何も見えないはずだ。今にも崩れ落ちそうな骨材の真中に、一箱の檻がかすかに揺れていて、上空ではワイヤーロープが銀色に光っている。それを見あげてためらっていると、入口に坐って眠ったふりをしていたらしい男がぼくの脇の下から手をまわし、真鍮のノブを握りしめた。鉄格子が錆付いた音をたてた。背中をつきとばされて中に入ると、檻の外には顔一面に黒い縦縞の影を映した男が、にやつと笑って片眼をつぶっている。だがいつまでたっても開かないところを見ると、その男はもともと片眼なのだ。パシッと鉄格子が締まると、キラキラと雪のような埃が降ってくる。実際には、埃は落ちてくるのではなく、暗闇の中に遊泳しているのだ。ほとんど静止しているその埃の中をエレベーターがギシギシと昇ってゆく。ぼく

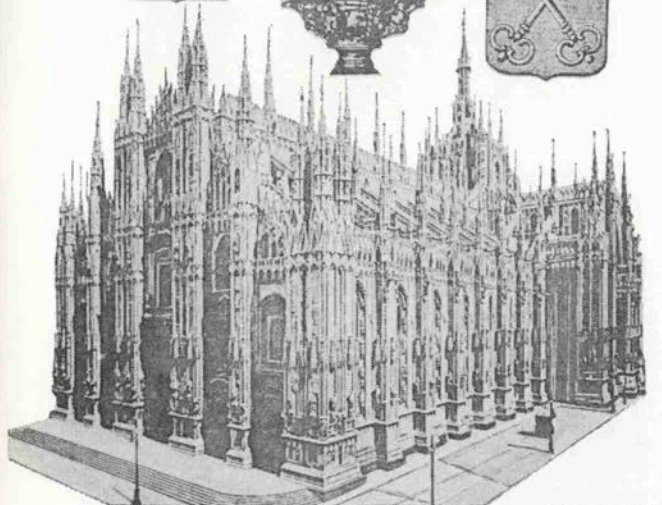
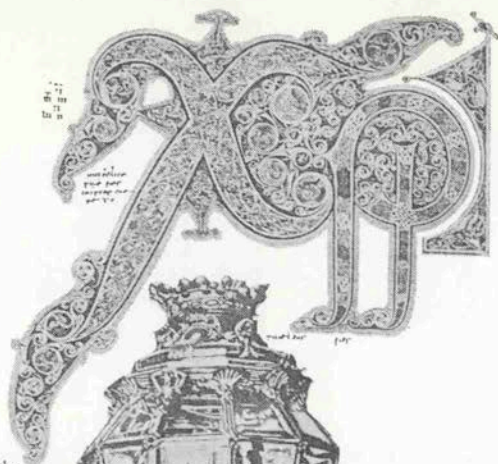
の入った檻は一階昇りすぎ、あわてて飛び降りて螺旋階段を下ろうとすると、鉄製の階段は途中から崩れ落ちている。闇が暗い口を開いている。しばらく覗きこんでいると、眼が慣れてきて、鉄骨にひっかかった子供の三輪車、足のとれた人形、破れた日記帳が見えてくる。さらにもっと深い所には、死んだ小犬や壊れた虫籠が見えてくるはずだ。

呼び戻したエレベーターが五階に着くと、壁の時計が逆に回転し、五分間失われた時間を元に戻したのかと思つたが、ホテルの入口のガラスに、エレベーターの円形階数表示盤が映っているだけだ。ガラス扉を押しあけると、暗いサロンの奥にチーク材の重そうなカウンターが見え、黄色い光の電気スタンドの下で、白髪まじりの婦人がさかんに事務をとっている。磨きあげられたチーク材を指の先でたたくと、受付の女は始めて眼を上げてパスポートを見せろと言つて手をさしのべる。しばらくはサロンのソファアに坐らされたが、あの暗いサロンのさらに奥の方に急に光が点り、ガラス戸に何やら人影がうごめいている。さらに光はサロンに水平に差し込んで壁に巨大な男の背中を映し出している。幸いにして、女に呼ばれたぼくが受け取った鍵の部屋は、その光源の方

向らしいので、ぼくの好奇心は一応満足させられそうだ。
 女の指図どおり、客室へ向かう磨りガラスを押しあげると、男が一人座りこんで何かを作っている。それは純白の建物の模型のようだ。男は首を傾げて建物の小さな人口の内部を覗きこみ、様々な道具を選びながら、細かい手仕事に熱中している。男の坐る丸椅子の隣にもう一つ同じ形の丸椅子があるので、ぼくは黙ってそこに坐った。
 △これは大層立派な大聖堂ですね。▽△お前は笑わんのかね。あの女はこれを見るときいつも笑うんだ。▽△あの女とおっしゃいますと、受付の方ですか。あの方はあなたの奥様だとお見受けいたしますが。▽△あの女はわしの友達だよ。友達だからわしはずっとここに居て、こんなことをしていいんだ。▽と言いながら、男は両手に張り付いた白い粉をこすり落とそうとしたが、それは手の平だけでなく、手の甲も手首も真白に染めあげていた。△ちよっとこ質問させていたきたいのですが、この白い材質は何でしょうね。▽△これはカルシウム

だ。天然のな。▽△天然のカルシウムと言いますと、石灰ですか。▽△石灰はカルシウムなんかじゃないよ、よくここを見てみるよ。ここだ。▽それは明らかに人骨だ。建物の伸びやかな梁や柱の部分には、足の骨やら腕の骨がそのまま使われている。あわてて立ちあがると、足許にバケツがひっかり、その中には充分に砕ききれない骨髄が無造作に詰めこまれている。純白の骨粉は机の上の丸い器の中で練りあげられ、彼の素手が建物の壁を塗りあげる。

△どこ家でも、地下室を掘り起こせば、これくらいの人骨は出てくるものだ。▽と言いながら、男は巧みに組み合わされた人骨の上を撫でて見せると、ぼくのこの腕を驚嘆みにして△ここから、覗いてみるよ。▽と引張るのだ。教会の入口から内部を覗くと、頭蓋骨が一つ見え、膠質が黒光りしている。△金があれば、こいつに金箔を張ってもう少し祭壇らしくするのだが。それにあの二つの瞳孔にも光を入れて、祭壇を見やすくするのだ



が。そら祭壇に十字架が見えるだろ。▽

だが、いつまで眺めていても、そこには暗闇があるだけ、ぼくには何も見えなかった。男はいつまでもぼくの腕を握りしめ、△見える▽とぼくが言うまで離さないつもりらしい。それに、これほど顔を入口に押しつけられ、内部が真暗になるのは当然だ。何とも言えないまま顔を上げると、男にすまない気がして、男にどんな顔を見せればよいのか分らなくなる。やむなく、男の表情を盗み取ろうとして、初めて男の顔を見た。男の顔にはサングラスが掛かっており、白い聖堂の虚像がふくらんで映っている。△見えました▽とぼくが言ったのは、彼が朝の広場で出会った宝くじ売りの男だからだ。男の頬が花びらのように笑う。△見えるだろ。よく見えるだろ。

ふん、なかなかよく見える。▽と言いながら、男は聖堂の入口に顔を張りつけて、真暗闇に熱中する。彼の手探りの作業は暗闇の中でなされ、ぼくの足音を聴きつけた時に、男はあわてて電灯のスイッチを入れたのだ。黒いスイッチは骨粉で真白だ。△ところで、お前はここに何日泊まるのか。▽△まだ決めてはいませんが、ぼくは氣に入った所には何日でも泊まるのです。▽△そうか、それならここには何日でもゆっくりしてゆきなさい。も一つ聞くが、お前はどこの人間か。▽△コウベです。▽△コウベというのはパリより遠いのか。▽△ええ、パリのずうっと向こうです。▽△そんな所まで行ったこともないが、まあいいだろう。ここもいい所だよ。ゆっくりすればよい。ここマダムはわしの親友だ。▽△でも、ぼくは、今朝ここに着いたばかりで、もう休みたいのです。▽△ああ、そうだろうな。そうだったらお休みなさい。わしは朝が早いので、明日お前が早起きできればよいのだが。▽

ぼくは彼の部屋から出る時に、おもいきってスイッチを消した。パチツと音がして、△おやすみ▽という男の声がした。これで一つの了解ができた。

ベッドに潜りこむと、淡い光の洩れるカーテンを縫っ

て、海の音が聴こえる。そうすると、ぼくが迷った道は海に逆戻りする道なのか。窓を開けば港が見えるかもしれない、と思いつながらもぼくは立ちあがらない。ぼくの体は、しだいに眠りの中に落ちてゆく。それも回転しながら、真つ逆様に落下しつづけてゆくと、螺旋階段が見えてくる。先刻この建物で覗きこんだ螺旋状の暗闇だ。階段の骨材は、鉄骨のはずなのに、人骨に見えてくる。骨材には、破れたバラシユート、赤い旗、黒い旗がひっかかり、それを翻しながらぼくの体は、しだいに冷たい湿った空気の中へと降下してゆくようだ。やがて細かな水滴が顔に当たり、霧の中では無数の髑髏が濡れて光る。ぼくの体は風圧を受け、すりきれそうになり、息も止まりそう。もう、こうなれば粉々になってもよいから、何かにぶつかって停止したいものだ。手掛りはない。骨材の向こうでは様々な光が消えてゆく。階段の踊り場では子供たちが遊んでいたが、母親の鋭い声に脅えながら呼び戻される。人影はあわててドアに入り、振り向いて落下体を一瞬垣間見るために、頭蓋骨の顔をもちあげる。やつと、水面が見えてくる。早く、ぼくの姿がそこに映ればよい。映れば、やがて着水する。そう思う間もなく、水面は真赤になり、血の海だ。

目覚めると、ぼくはベッドから床に落ちていて、昨夜締め忘れた窓から、目蓋を赤く熱する朝日が差し込んでいる。ぼくは体を朝日に晒し、寝汗といっしょに悪夢が蒸発してしまうのを待っている。だが、どこまで逆のぼつても夢には始まりが見当たらず、昨日の現実には終りが無い。もし夢でなければ、昨夜このホテルで再会した盲と朝食を供にできるはずだ。そうだ早く起きればよい。早く起きてサロンへ行こう。そして一番乗りで朝食を取ろう。

サロンには朝日が溢れ、光の中に港が見える。海に向けてテラスが舌を出し、その上でぼくはテーブルに着き、人待つ。誰もいないテーブルは影を待つ。逆光の中、きらめく海のさざ波の中では、船の影が海を切り抜き、

開の船体を浮かべている。うなだれて何もすることのないクレーンは涎状のワイヤーを垂らして風に揺れている。岸壁にはいくつかの人影が見える。街はそこで終るが、海はそこから始まる。人影がそこに立つと、何かしら勇気づけられるのはそのためだ。だが、二度目にそこに立つ人影は、その希望も第二の絶望の始まりであることを知っている。船影はやがて去ってゆく。去ってゆくことを示すためにだけ、じっとたたずみ、水平線を踏み越えることを、まるで人生の目的のように見せかける。振れながら、クレーンが海をのぞきこみ、吊り落とした重荷の数々を想い出している。その横で、船を繋ぐロープは、優しく肩に差し延べられた女の細腕に見える。だが、頑強な男の肩越しに△あばよ△と言う唇が覗くと

き、それは力なく海に落ち、汚れた水死体のように引き揚げられる。汽笛が鳴る時、すべての窓は震動に霞み、海や涙、その他あらゆる液体は凍りつき、鳴り終るまで動かない。一瞬通りすぎる風が汽笛を運び去る。港の機関車は、ひとり部屋にとり残された病気の子供のように、痰のからんだ喉をせいいぜい鳴らし、微熱に体を震わせながら、積んでは崩す積木遊びに熱中する。積木にはおびたらしい文字が乱雑に打ちこんである。

かもめだ。空から落ちてきて、たちまち海の青に染まりそうな一点の白。やがてそれは群をなし、痛い白の輝きを増すと、空と海は以前にもましてその青を増す。こんなに海が青いと、人影は孤独に見える。人影の位置からだ、海以外の何も見えないはずだ。孤独は、海に浮かぶかもめのように、平衡感覚以外のすべての支えを喪失させる。今までしがみついていた様々な観念が、砂の城のように水に流され、青く染まる。思考さえ言葉を失い、言葉はばらばらに海に散らばり、きらめくさざ波にまぎれる銀粉となる。頭の中は青空のようにからっぽだ。

いつまでも一人ぼっちのテラスに坐り、ふと見ると真白なラウンドテーブルには一点の染みも影もない。だからぼくはテーブルの影や椅子の影に奇妙な親しみを覚え、なによりも、長すぎる自分の影に安心する。久しぶりに再会した友人のごとく、ぼくは自分の影に挨拶し、影法師を追いかけて、そのままサロンを通りぬけて外に出た。

ランブラス通りでは何でも売っている。だが並木の蔭の店頭を飾っている看板には偽りがある。たとえば、さも怪しげな花文字で△恋△と書かれた看板をくぐりぬけると、ほのかな香煙が薄暗い階段を導いてくれる。二階の広間に入ると、その中央には、なにやら贗物くさい中国風の香炉が艶やかに照明を浴びている。これが



この店の客引き用のシンボルであるらしく、その周囲には半透明の衣服に包まれた女たちが、よく揉みほぐされた肉体をさらにアルコールで柔らげながら、またたびに酔った猫の姿態で寝そべっている。ぼくが広間に入ると、二人の女が顔を見合わせて、けだるそうに起きあがりながら、△何時だと思ってるの。わたしたちのお仕事は今さっき終ったところよ。▽と近づいてくる。だが、ぼくには、どこの店に入っても店員の口には耳も貸さずに黙って商品に見惑れる癖があり、よく見るためには、よく黙ることが必要だという信念がある。しかも、ぼくに近づいてきた二人は、どちらも不美人で、一人はロボのように鼻が長すぎ、もう一人は痩せた鼠のような顔をしている。ぼくが気を引かれるのは、香炉の陰でうつむいて、まだ少女の手つきで煙草をふかしている黒い髪の女だ。ひよっとすると、彼女は昨日ランブラス通りでシトロエンに飛び乗ろうとしてあわててぼくにぶつかった、あの鹿のような少女かもしれない。ぼくは黙って彼女の横に立った。返事がないので、彼女の煙草をとりあげて吸った。△なによ、この恥知らずめ。▽と、ぼくの背後にまわった二人の女のうちのどちらかが言った。△とつと二人でどこにでも行きなさいよ。仕事はもう終わったんだからね。▽と、また背後で声がした。

黒髪の少女は黙って廊下を歩いた。ぼくの行くところは決められているし、この店の仕事は終わってもいい。すべては、言葉と裏腹に進行する。それに、呼ばれもしないのに、先程の二人の女がついてくる。ついてきて、大きな音をたてて寝室のドアを締めた。黒髪の少女は、黙って微笑みながら乳房を握らせた。にぎらせながら、自分で下着をとった。ぼくの下着は勝手に入ってきた二人の女が背後から、まくりあげたり、ずらしたりして、取り上げた。ぼくが少女の体を求めている間も、背後の二人は、ぼくの体を撫ぜまわし、背中じゅうを唾液で濡らそうとしている。二人の女の手を振り切って、ようやく少女の体にぼくを含ませると、今度はぼくの尻に顔を

埋め、陰囊と肛門の間に舌を往復させた。そのために、ぼくは不純な夢に悩まされ、甘ったるい思いが下腹部に募り、その思いを少女に腹を割って打ち明けようとしたとたん、もう一人の女がぼくの肛門に指を差し入れて、その想いを無理矢理に吐き出させてしまった。

ぼくは、勝手に他人の体をもてあそんだ二人の女に、日本語で怒鳴り散らした。二人の女は、黙って両手の甲を腰に押しつけ、得意気な表情で顎をつきだしている。少女を連れて外に出ようとすると、二人はドアに立ちただかり、金を出せと言う。ぼくは少女に五百ペセタ札を渡すと、鼻の長い女がいきなりそれを取り上げて、股に挟み込んだ。気持が悪いので、そこには手が出なかった。もう一枚の五百ペセタ札を、少女に手渡そうとすると、△なによ、どうしてこの女ばかりにやるのよ。この女は何もしなかったじゃない。何もしないで寝ただけよ。サービスしたのは、わたしたちだよ。▽と痩せた鼠が少女の手からそれをもぎりとった。△あんたは、このお兄ちゃんとランブラスでデートしな。まだまだ、ボンボン・シヨコのほうがお似合いなんだから、お金が取れるようになるまで外で修業してきな。ここはお人形屋さんじゃないんだからね。人形みたいにしてたつて金にならないよ。まあ、なかには人形の好きな男もいるけどさ。▽そう捨てぜりふを残すと、左手に五百ペセタ札、右手に一握みの衣服を抱えこんで、素裸で部屋を出ていった。少女をこの店から連れ出さない限り、少女には一ペセタも渡せない仕組になっているらしい。少女を連れて階段を降りようとする、受付の男が長い腕を伸ばして見せ、△だんな、その女、連れ出すんだったら七百ペセタ置いてきな。それだけ出せば、その女に何したっていい。▽早く外に出よう。ランブラス通りでは何でもできる。

(つづく)